

田中 浩一

ポーランドの文化と芸術

ポーランドは、東欧の大国として知られる。その歴史は古く、文化も豊かである。特に音楽と文学は、その文化の重要な部分を占めている。このページでは、ポーランドの文化と芸術について詳しく紹介する。

ポーランドの文化と芸術

ポーランドの文化は、長い歴史と伝統を持つ。その中心には、宗教と芸術がある。特に、バロック様式の建築や、古典音楽の発展が特徴的である。また、文学においても、多くの傑出した作家が生み出されている。

ポーランドの文化は、長い歴史と伝統を持つ。その中心には、宗教と芸術がある。特に、バロック様式の建築や、古典音楽の発展が特徴的である。また、文学においても、多くの傑出した作家が生み出されている。

ポーランドの文化は、長い歴史と伝統を持つ。その中心には、宗教と芸術がある。特に、バロック様式の建築や、古典音楽の発展が特徴的である。また、文学においても、多くの傑出した作家が生み出されている。

ポーランド・日本協会会長

クロー教授の講演行われる

——キュリー夫人の業績と生涯

ポ文協の第四回目の行事として、去る三月二十六日、札幌市国際交流プラザで、ポーランド・日本協会会長、前ウツジ工科大学学長ジェルシー・クロー教授による講演が行われました。帝政ロシア下のポーランドの珍しいスライドを交えた興味ある講演でした。講演の後には聴衆から多くの質問もあり、盛会の内に終了しました。以下はその要旨です。

ポーランドのウツジ市には、約二百五十人の会員を擁するポーランド・日本協会があります。この会を代表して、北海道ポーランド文化協会の会長ならびに会員の皆さんに挨拶をおくりします。

マリアの誕生

マリアは一八六八年に当時帝政ロシアの支配下にあったポーランドに生まれました。それより少し前の一八六四年一月のロシアに対する蜂起が失敗に終わったため、二年ほどの間アレキサンダー二世の弾圧が続

きました。その当時、ポーランドはビスワ河のほとりの国と呼ばれ、ワルシャワはロシアの一地方都市にすぎなかつたのです。マリアの両親は教職にありました。学校ではポーランド語教育が禁止されていましたが、家庭ではポーランドの言語および文化の教育が行われていました。これは一種の地下活動です。

国として独立していない状況のもとで文化が栄えた例は、歴史上少なくともそうで、芸術、文学、音楽等がめざましく発展しました。当時の有名な芸術家としては、パデレフスキー、ヴィニアフスキー（作曲、ヴァイオリン）、モニユスコ（オペラ「呪われた屋敷」）、ヘンリク・シエンキエーヴィチ（クオヴァデス）、プルス（作家、ワルシャワのことを毎日新聞に書いた）、ジェロンスキー（作家、ポーランド解放と平等について論じた）、モジエンスカ（女優、シエイクスピア劇）などがあげられます。

マリアは十歳のころに母親を失い

ました。家庭は貧しかったのですが、学校の成績は優秀で、女学校の卒業時には優等の金賞を得ました。特に理科に優れていたといえます。

科学者への道

女学校卒業後、農業博物館に勤めてボブスキー教授の下で仕事をしました。教授は彼女の叔父で、メンデレーエフの助手をしたことのある人でした。マリアは当時の規則で、女性であるためポーランドの大学に入ることはできませんでしたが、彼女の後年の成功はこの人に負うところが大きいと、彼女自身が言っています。

一八九一年には父と姉の援助でパリのソルボンヌ大学に入学し、物理と化学の免状を得ました。一八九六年にピエール・キュリーと結婚し共同で研究を行いました。夫婦はそれぞれ化学と物理を分担しました。

一八九五年にはレントゲンによるエックス線の発見、一八九六年にはベッケルによるウラン放射線の偶然による発見がありました。キュリー夫妻は木造小屋で研究を続け、数トンの鉱石を処理してウランよりも強く放射線を出す物質を発見しました。すなわち、一八九八年にポロニウム、続いてラジウムを発見したので、イレナとイヴォンヌの二人の娘

を育てて、生活は苦しかったのですが、子育てと研究を両立させました。一九〇六年に夫のピエールを交通事故で失ったからは、全てがマリアの肩にかかることになりました。

一九一一年にポーランドの学者のグループがフランスを訪れ、マリアをポーランドに招へいしようとしたが、彼女は結局最後までパリの実験室や助手を捨てようとはしませんでした。しかし、一九三四年に亡くなるまで、ワルシャワのラドン研究所の世話をし、ポーランドとの強い絆を保ちました。

ノーベル賞を二度受賞

第一次大戦時に彼女はフランスの市民権を得ました。そして、戦場でラジウムを用いた救護活動を行いました。これはエックス線を治療に用いた世界で最初の例になりました。彼女は女性科学者として最も有名であり、約百の学会に属し、約三十の名誉博士の称号を得ました。アインシュタインとの友情はよく知られています。彼はマリアを「謙譲の人」と評しました。彼女は二度渡米し、最も有名な科学者として歓迎されました。アメリカの篤志家たちは、二十万ドルもするラジウム・グラムをマリアに贈りました。

一九〇二年にベッケルおよびピエールとともに、第一回のノーベル物理学賞を得ました。また一九一一年にはノーベル化学賞を得ました。女性で初めての受賞であり、また二度受賞した人は女性ではいまだに彼女だけです。一九三二年には娘のイレネがジョリオとともに二番目の女性受賞者となりました。

マリアは一九三四年に白血病で亡くなりました。初めのころはわからなかつたのですが、放射線の障害によるもので、後年には指先の感覚が無くなり、ほとんど失明状態でした。

ポーランド週間に多彩な提案

さる十月二十八日、総会に先だつて「ポーランド週間」についての話し合いが行われました。これは、本年八月三日に公益信託「国際交流ホスピタリティ」トラストより、本協会に対して「ポーランド週間」開催のための補助金が給付されたことを受けて、「ポーランド週間」の催しものについて提案をしていただくために持たれたものです。席上で多くの人たちからさまざまな提案がなされました。その内容はおおよそ次のよう

なものでした。

それでも実験室に毎日出かけたという事です。その当時のポーランド人学生の一人が、ウヅジ工科大学化学物理研究室のドラビアルスカ教授です。マリアはフランスの学会にはあまり好意的に受け入れられたわけではなく、またフランスから財政的な援助も受けていませんでした。しかし彼女は特許を人類の宝として公開しました。

偉大で、謙譲の美德を持ち、科学の真理を求めた人として、マリアは今なおポーランドの人々から深く愛されています。(4号88年8月)

- ① ポーランドの歴史、政治、教育、文学、音楽、映画、美術などについて連続講演はできないか。また、ポーランドの政治状況について今どうなっているか、解説してもらいたい。大使館の人などにたのめないか。
- ② ポーランドは「子供の権利条約」の制定を推し進めるなど、児童関係の問題に関心がたかい。児童文学関係の資料や子供の絵の展示をかんがえたい。また、それに関係している人たちを東京から呼びたい。
- ③ 映画、絵画など造形関係の催しも

のをまとめておこないたい。映画監督を呼んだり、映画会を開いたり、懇談会をしたりしたい。

④ ビデオやスライドでショパンコンクールの歴史を紹介できないか。

料、ポーランドの子供の絵の展示会、それらに関係した講演会などを行う。補助金は十五〜二十万円程度。実行委員長は斎田道子氏。運営委員会からは小林、灰谷、布施の三氏が参加。

実行委員会づくりへ

十月二十八日の懇談会での提案にもとづいて、十一月二十七日の運営委員会では、「ポーランド週間」の具体的な企画、実行について話し合

れました。活発な討論の結果、「ポーランド週間」では①児童文学関係、②映像芸術関係、③音楽関係の三分野をとりあげることになり、次のように三つの実行委員会(の核となるもの)が組織されることになりました。

- ① 児童文学関係 児童文学関係の資

六月にポーランド週間

講演会、展示会、料理講習会など

多彩なもよおし

本協会では、国際交流ホスピタリティトラストと札幌市国際交流プラザの後援のもとに、第一回の「ポーランド週間」を六月十七日から十三日間札幌で開催することになりました。四月二十六日の運営委員会では

この期間中の催しものとそれに関連する行事について次のように決まりました。なお、それぞれの行事の案内は、本誌の二ページと三ページにまとめて示してあります。

(13号90年12月)

●児童文学関係（責任者・斎田道子さん）

・国際的にも注目されているポーランドの児童文学を多面的に紹介する。

・六月二十一日の午後にはポーランド児童文学の専門家である内田莉沙子さんの講演を行う。

・ポーランドの絵本の原画や人形の展示を行う。展示場所としては札幌市国際交流プラザと天神山国際ハウスを予定する。

・ウツジの吉田勝一氏が現地の文化センターの絵画クラブの子どもが描いた絵（〇〇四年生）とポーランドの小学校の教科書をだいぶ集めておられたので、ただちに日本に送って下さるよう依頼した。

●音楽関係（責任者・大竹貞さん）

・レコードコンサートとお話（遠藤道子さん）を中心とした催しものを考える。

・一九二七年からの国際シヨパンピアノコンクールの歴代の優勝者の演奏を取り上げて解説する。

・シヨパンコンクールに関係したスライドなどを上映して、一九六〇年代における見聞を中心にシヨパンコンクールの実際の印象を語ってもらう。

●ポーランド料理の会（責任者・小林暁子さん）

・料理講習を通じてポーランドの食文

化の理解と紹介を目指す。

・六月二十六日（水）に婦人文化センターで行う。

・受講申し込みは先着順で受け付け、定員になりしだい締め切る。

●ポーランドの時事問題の解説（責任者・小笠原正明さん）

・北大スラブ研究センターの伊東孝之さんに講演を依頼する。

・ポーランドの最近の政治、経済の現状について理解を深める。

●映像芸術関係（責任者・霜田千代

磨さん）

・予定を変更してポーランド週間中には映像芸術関係の行事は行わないことにする。

・本年十月七日山形で行われるドキュメント映画祭にポーランドの映画監督が参加する予定なので、札幌にも来てもらうことを考える。

・映像関係の行事はその時期に集中して行うことにする。

・そのための予算を確保しておくようにする。（14号91年5月）

「ポーランド週間」行事案内

主催 北海道ポーランド文化協会

後援 国際交流ホスピタリティートラスト

札幌市国際交流プラザ

《講演と展示》ポーランドの児童文学

①講演「ポーランドの児童文学」（仮題）

〈講師〉内田莉沙子氏（日本における唯一のポーランド児童文学の紹介者。訳書多数）

〈日時〉六月二十一日（金）

午後一時三十分より

〈場所〉札幌市国際交流プラザ会議室

（中央区北一西三MNビル三階）

〈入場〉無料（定員五十名程度）

②展示「ポーランドの絵本とその原画」

〈日時〉六月十七日から二十九日まで

〈場所〉札幌市国際交流プラザ

〈入場〉無料

③展示「ポーランドの児童画、人形、その他」

〈日時〉六月二十日から二十七日まで

〈場所〉札幌天神山国際ハウス

〈入場〉無料

《レコード鑑賞と講演》

国際シヨパンコンクールの歴史

一九二七年からの歴代優勝者のレコード演奏とスライド上映

〈お話し〉遠藤道子氏（日本シヨパン協会北海道支部長・北海道ポーランド文化協会副会長・大谷短期大学教授）

〈日時〉六月二十五日（火）

午後六時三十分から

〈場所〉タイムスホール

（中央区南三四アルシユ六階）

〈入場整理券〉一〇〇〇円

〈後援〉日本シヨパン協会北海道支部

《講習会》ポーランド料理の会

〈講師〉熊倉ハリーナ

〈日時〉六月二十六日（水）午前十時

三十分から午後三時まで

〈場所〉札幌市婦人文化センター

（中央区大通り西十九）

〈参加費〉一〇〇〇円（材料代）

〈献立〉ごはん入りロールキャベツ、キノコのスープ、トマトサラダークツ

テージチーズのソース、イチゴクレー

プ、パンと紅茶

〈持参品〉エプロン、ふきん

〈申込み〉灰谷洋子氏まで。四十名になりしだい締め切ります。男性の受講者も歓迎します。

《講演会》最近のポーランド情勢

——民主主義の実験は成功するか？
〈講師〉伊東孝之（北大スラブ研究センター教授）

〈日時〉六月二十七日（木）午後六時
三十分より

〈場所〉札幌天神山国際ハウス
〈入場〉無料（定員五十名程度）

（14号91年5月）

内田莉莎子氏の講演を聴いて

柏原朝子

日頃から尊敬している内田莉莎子氏の講演を目の前で聞けるとは思ってもいませんでしたので、この企画を知った時、私はとてもうれしく、その日を心待ちにしていました。

「もしポーランドに出会わなかったらば、今日（こんにち）の私はなかったかもしれない」と、莉莎子さんは、やさしい美しい日本語で話し出されました。

生い立ちから始まり、露文科を選んだ理由、ポーランドの児童書との出会い、ポーランド留学のいきさつなどを、時にはユーモアをまじえて感動的に話してくださいました。ワルシャワ留学はしたものの現実はずいぶん、本をさがして本屋を歩き回ったり、出版社に向いたり、日本では考えられないような苦労話も聞かせてくださいました。このような苦労の中から、「灰むすめ」のような

昔話から「すばらしいフェルデナン」のような現代物まで、次々と名訳が生まれていったのでした。

莉莎子さんはポーランドの児童書の魅力を、地味で盛り上がりには乏しいが、説教くささがなく、内容に意気や自由な雰囲気があると述べられました。

情熱的でみずみずしさのあふれたお話に、心が洗われ、久しぶりに豊かな満足感を味わわせていただきました。ありがとうございました。

（15号91年9月）



いもだんご

——ポーランドの食習慣——

熊倉ハリーナさん談

カナツペ、それに紅茶、少量の果物などを食べます。この時間には役所などの窓口には「朝食中」という札が出ていて、お休みとなります。

朝食（オビヤード）は午後一時からです。朝食が一日中の主要な食事となります。家族がそろってゆっくり楽しむのがポーランド人の習慣です。しかし、共働きの家庭ではそれぞれに職場でとるようです。

メニューはスープ、肉類の煮込み

ポーランドでは職場や学校が午前七時に始まります。朝食（シナダーニエ）は、午前六時ころにとります。パンにジャムやバターをつけて牛乳を飲みます。町に住んでいる人は、朝にはパン（フランスパンかバターロール）とバターなどを買に行きます。バターは塩分の少ないもので、二、三日おきに買います。

午前十一時ころ、第二朝食（ドゥルギシナダーニエ）があります。職場や学校でも二十分くらいの休憩時間があり、簡単なサンドウィッチか



料理、じゃがいも、サラダ、パン、デザート（ケーキと紅茶）です。日本の夕食のように、一番手をかけた料理を食べます。煮込み料理はそのときどきで、クレープ、ピエロギ（ギョーザ風のもの）、マカロニ料理と変わります。じゃがいもは一日一度は食卓にのぼります。じゃがいも料理はいろいろあります。日本のいももちに似た「いもだんご」を作り、温かいうちにバターであえて食べます。いもだんごは一度にたくさん作り、翌日ためて食べたりします。

職場は午後三時ころには終わります。夕食の時間まで家庭菜園を作ったりする人が多いようです。

夕食（コラツィア）は午後七時ころです。夕食には軽くパン、玉子料理、ワインナーソーセージを温めたものなどを食べます。

主婦の家事をすくなくするために、オビヤードで作った煮込み料理を温めなおして食べることもあります。日曜日は午前中に教会に行き、オビヤードは家族そろってゆっくり食べます。

クリスマス・イヴは、家族がそろって正装してクリスマスの誕生を祝う特別の日です。テーブルに真っ白なクロスをかけて、家族の数より一人分

多く食器をセツトします。食事のメインは七面鳥です。そのほか、魚野菜を使った料理などです。ポーランドでは、クリスマスには獣肉の料理は食べません。油もいつも使うラードではなく、ナタネ油など植物性の油を使います。

魚料理として、塩漬ニシンと鯉のフライ料理をかならず作ります。野菜料理は、野菜と干しキノコなどを使った料理です。ピゴスにも肉を使

わず、干しキノコで味付けします。ビーツを使った赤いボルスツ、豆とザワークラウトの煮込みなどです。マカロニ料理も作ります。けしの実と蜂蜜で作ったソースでマカロニを食べます。

飲物は白ワインで、ウオツカは飲みません。食事を済ませたあとは、教会のミサに出かけます。

（16号91年10月）

北海道ポーランド文化協会の 歓迎レセプションによせて

駐日ポーランド共和国大使

ヘンリク・リップシツ

本日、私の為に素購らしい歓迎会を催してくださいました北海道ポーランド文化協会会長・今村成和様に厚く感謝致します。また、お忙しい中、ご参加下さいました皆様に、心よりお礼申し上げます。

この度の北海道訪問は、昨年十一月末に駐日ポーランド大使として日本に着任して以来、初めての

のであります。とりわけ、文化のみならず学術分野において、ポーランドと深い絆をもつ北海道の地を訪れる機会に恵まれましたことは、私の大きな喜びであります。

雄大な自然に恵まれた北海道の風景を眺めておりますと、ポーランドの地を思わせ、ふるさとをなつかしく感じずにはおられません。私のよう

に、多くのポーランドの文化人、学者、学生達もまた、北海道の自然に、この街に、そして北海道民の皆様が故郷の香りを実感したのではないかと存じます。

本日は、これまでポーランドと北海道との間の友好親善促進に多大の貢献をされてきた貴協会ならびに会員の皆様に厚く感謝の意を表明いたします。ポーランド文化協会が主催して、ポーランド音楽コンサートをはじめ、映画上映、専門家たちによる文化および政治講演などを催されたことは道民の皆様にとつて、一層ポーランドに親しみをもたれる機会になったものと思えます。



今後とも、皆様の活動によって、ポーランドと日本の間の様々な分野における交流がより実りあるものに発展して行くことを切に望んでおります。

最後に、このような温かいおもてなしに預かりましたことを、貴協会ならびに会員の皆様に重ねてお礼申し上げます。

(一九九二・五・二二、19号)

— 博文協・修学旅行記 —

私のある日の「十勝日誌」

栗原 朋友子

私は主人の転勤にともない北海道で生活をするようになり三年が経過しました。これまで幾度となく道東旅行をしたかと思っていたものの、実現しないまま時が流れました。

今回(平成七年九月三十日～十月一日)北海道ポーランド文化協会の計画で池田町を訪れることが出来ました。

石勝線・根室本線特急「おおぞら」で三時間十分の列車の中から一行十名の「修学旅行」がはじまりました。北海道ポーランド文化協会会員で池田町在住の藤平隆氏が現地での受け入れの準備をすべてして下さり、池田駅で氏のお迎えを受けて一行の行動が開始されました。

藤平氏は池田町教育課長で田園

ホール館長をなさっています。一行はまず最初に田園ホールを見学しました。文化活動の施設として平成二年に完成したこのホールは多目的ホールで六百人が収容できるといわれ、二百六十席の電動可動式階段席があるのが特徴で、ピアノはベーゼンドルファーインペリアルであり、この他にチェンバロまで備えているという大変立派なホールでした。ホール内には会議室・三十畳の和室・研修室があります。もっともうらやましく思いましたことは、札幌ではポーランド料理講習会を計画した場合でも、調理室で頭を悩ませ、その設備のある会場がふさがっていると計画中に大きな調理室(八十一平方

メートル)があり、鏡がもうけられていて、後ろの席の人にも料理の先生の手元が写し出されるようになっていました。池田町の人口は一人一人にもならないことをきき、のどかな十勝平野の中に、こんなに恵まれた文化施設のあることに驚きに似た感動を覚えました。

十勝は道内屈指の穀倉地帯として有名であると旅の本で読みました。車窓からながめる景色は他で見られない素晴らしいものとして私の目に焼きつきました。

池田町は歩道までワインカラーで色どられ、タクシーまでも「ワイン・タクシー」で、町をあげてワインの普及に力を入れていることが感じられました。

ヨーロッパの城塞をかたどったワイン城は同町のシンボルとなり、この城がヨーロッパの中世の古城に似ているところから「ワイン城」の愛称で呼ばれ親しまれている話を聞いた後、一行はワインの製造過程を見学、地下の貯蔵庫まで特別にみせていただき、三階に上って売店で早速「セイオロサム」(凋寒)を飲んでみたが、おいしかった。

モリオ・マスカット種を主原料として数種類のブドウからつくられ、バランスのとれた辛口のワインを池

田町に来ることができた感激とともに味わいました。

池田の歴史によると、明治三十九年に凋寒村となり、大正十五年池田町と改称されたと記され、ブドウ栽培を始めたのは昭和三十六年頃のこと。十月第一日曜日は秋のワイン祭りとして町の主たる行事の一つとなっている。

このワイン祭りに前夜祭から参加できた幸せを忘れることができない。

(32号95年11月)



池田町ワイン祭り(平成八年)

おそまき「池田町紀行」

霜田 千代麿

九月三〇日（土）午前九時、札幌駅集合。男五人女四人計九人、本間さんは夜六時過ぎ池田着の汽車にて合流される。午前九時五三分の釧路行き特急おおぞら三号に乗り車中の人となる。

新得あたりで昼弁当を食べる頃はすっかり和気あいあいになっていた。午後一時一〇分池田着、駅舎を出ると、藤平さんが白い帽子に白のトレーナーの上下を着て出迎えて下さる。

なんでも、少年野球大会の開会式で挨拶しなければならぬので、皆さん「田園ホール」へ行って休息して下さい、との事であった。

何しろ、天気は最高、空気は澄んでいる。後でわかった事だが、こんな良い天気を「十勝晴れ」と呼ぶのだそうだ。

「田園ホール」の立派さに一同嘩然としている。入口には壁一面のステンドグラス、ホールの中には大きな舞台がある。電動で収納できる階段式の椅子席等々。そして、建物の中には他に「カントリー講座」と呼ぶ織物教室等が有り、タペストリの作品等が壁に張ってあった。

その夜はワイン祭りの前夜祭で「大通」と呼ばれる通りに露店やモギ店や夜店や、沢山の食べ物の屋台が出て賑わった。

ワイン無料飲み放題。焼きそばやら、おにぎりやらおでんを思い思いに頬張り満足した。

丁度、ニュージランドの高校生（交換で、短期間ホームステイしている）連中も参加して、なかなかの盛り上がりだった。

ワインの樽転がしの競争もあった。モギ店の中に毛糸の帽子を売っている店があった。それは、「カントリー講座」の人達の作品であった。

三、四人がそこで、お互いに、似合う似合うと喜んで買った。灰谷さんがサッポロのポーランド人が帽子を買っているぞと笑っている。

我々が投宿したのが、とうきび畑を過ぎた処に有る「牧場の家」と呼ばれるコテージであった。

これがまた、なかなかたいした物だった。女性達は「ポニー」と名のついた一軒、そして男共六人は隣のコテージに投宿した。

以上で一日目の行動は終了した、

といたいところではあるが、その夜、御当地のお客様を迎えて、「深夜の酒宴」とあいなった次第である。

池田町ワイン祭りツアーに

参加して

佐々木 保子

第二十八回例会は、（平成八年）十月五・六日「池田町ワイン祭り」ツアーを実施しました。例会としては初めての一泊二日の小旅行です。参加者は九名（内池田町在住会員二名）でした。

五日朝九時、札幌を出発。秋晴れの中、日勝樹海ロードの紅葉を楽しみました。鹿追町の神田日勝美術館を見学。日勝は、鹿追で営農のかたわら、油彩画を製作し続け、三十二才で急逝した画家です。ひっそりとした町の中に、近代的建物の美術館は、町のイメージ・アップに一役買っている様です。

その後は、十勝川を登って来る鮭を、千代田堰堤で見ました。鮭が川面を飛びはねる姿を見ているうちに、石狩鍋ならぬ十勝鍋を食べたいということになり、一路池田町に向いました。

流石、「北海道ポーランド文化協会」の名にし負う、修学旅行でした。

（33号96年2月）

宿泊予定の「まきばの家」は、町からはずれた丘の上であり、十勝平野に沈む美しい夕日を見ることが出来ました。到着後、町に出かけ、ワイン祭りの前夜祭に参加。いろいろな店が出ていて、ワインは飲み放題。町の人々と一緒に、食べたり飲んだりして、お祭り気分になりました。

午後十時すぎ、研修室で栗原先生の「ポーランドの諸都市の伝説」と題するお話を伺いました。

ワルシャワの名称の由来は、貧しい農家のワルシュとサヴァという双子の名前からつけられたという伝説や、ポーランドのシンボルの鷲の話など、ポーランドに伝わる民話を、いろいろの資料をもとにお話し下さいました。

池田町会員の差し入れのワイン、ブランドイーと、持ち込みのつまみで、宴会の様な雰囲気の中で、先生

が配布した資料を参考にしながら、まじめにお話しを伺いました。先生のお話から、いろいろ話題が拡がり夜遅くまで楽しい会話が続きました。

六日は、午前中、全員でパークゴルフを楽しみました。ややお腹が減ったところで、ワイン城の前で開かれ

ある日の旅だより

ているワイン祭に参加。ワイン飲み放題。焼肉食べ放題。楽しい例会となりました。

池田町会員の藤平隆さんと黒川俊男さんに大変お世話になりました。ありがとうございました。

(35号96年11月)

栗原 朋友子

ハリーナさん、お体の調子その後いかがですか。あんなに楽しみにしていた池田行きが、思いがけない病気で行けなくなりましたね。「ワインまつり」に行くときは、どんな服装で行けばいいのと、まるで子どもの頃の遠足のことを思い出すようなハリーナさんのキラキラと光った目を忘れられません。来年もきつと計画されると思うので、今しばらく体力回復に努めてください。ハリーナさんばかりでなく、おもわぬ事が重なり当初の計画の大型バスを貸切って池田に行くことが不可能となり、急に乗用車二台でゆく「ワインまつり」ツアーとなりました。

のんびり草を食む牛たちを眺めたり、季節の色と防風林がアクセントをつける畑をぬけ、いくら走っても

心地よい静けさと窓辺の風景は私には「デツカイドウホツカイドウ」でした。きつとハリーナさんが一緒に行っていたらポーランドの田舎の景色を思い出したと思いますよ。

エゾマツ・トドマツ・ダケカンバなどの深い原生林カーブを重ねて白樺林が見えてくると、そこは「樹海ロード」と名づけられた雄大な眺めを楽しむことができる道でした。

今回は寄り道も自由にでき、神田日勝記念館にも立ち寄りました。日勝のことは、ハリーナさん知らないでしょう。「農民画家」と言われるのを嫌ったということでしたが、開拓農民の二代目として農業を営みながら絵筆を握り、存在感あふれる絵を描きつづけ三十二才の若さで他界したんだそうです。日勝記念館の建物

の正面の壁にも馬が描かれていました。死を前にして描きつづけた「馬」が絶筆となったそうですが、未完成に終わり、二本の前足でバランスをとって立っている絵でしたが、切ないほど悲しい目にえがかれていて、これを見ると多くの可能性を残しながら、この世を去った日勝自身をものがたつているようにおもえました。

寄り道ついでに千代田えん堤も見学しました。十勝川を産卵のために川を遡ってくる大量の鮭をここで生け捕りにする秋の十勝ならではの見ものでした。これはハリーナさんにも見せてあげたい光景でした。

なかなか宿泊先の「まきばの家」にたどりつきません。やっとたどり着いたときは真つ暗になっていました。

池田の人口は一人にもならないそうですが、「ワインまつり」の時は人も急にふえ、振やかな池田町と変わってしまいます。札幌からだつてポ文協の会員が七名もいつているんですもの。「ポーランドの諸都市の伝説」と言う講演をききましたが、ハリーナさんがこの場においてくれたら、きつと私達にもっと違った面でプラスになったと思うと残念でした。

翌日の午前中は日頃運動不足の私達はパークゴルフをしました。ハリー

ナさんだつたらどんな打ち方をしたのかしら……と思うと今回の突然のご病気を恨みました。

ワイン城の前の小高い芝生の場所は秋の「ワインまつり」の会場です。食いしん坊にとつては池田のシンボル「十勝ワイン」の飲み放題と牛肉の食べ放題はこのうえもない喜びです。池田を豪快に味わえるのが「ワインまつり」です。

池田在住の会員さんともワインを飲みながら楽しく歓談の時をもちました。会場の多くの人がワインカラーに染まる頃、ポ文協のメンバーは池田町から新しく会員として入会すると意志表明を下された方のお祝いと会の今後の発展を願って乾杯の声をあげました。その声は会場に響きわたった筈です。

往復とも無事故の安全運転をしてくださった霜田さんと斎田さんにはご苦労さまと心から感謝をしました。来年こそはハリーナさん池田に行けるように健康に気をつけてね。霜田千代磨さんが詠まれた俳句で十勝の秋を味わってください。

- 十勝川水に抗い鮭帰る
- 河瀬上ののちの果ての秋の鮭
- かん酒やまたかん酒や秋深し

(36号97年4月)

第三十五回例会

メラノヴィチ先生の三つのお土産

一月十六日、北海道ポーランド文化協会の例会は現在（九八年四月～九九年三月）宮城学院女子大学へ交換教授として滞在中のクラクフ・ヤギエウオ大学日本学科長ミコワイ・メラノヴィチ氏をお迎えして行われた。

講演の中から、特に印象深かった事を三つ書いてみたい。

当日の講題は「ポーランドに於ける、日本文学の現状について」であったが、その内容は必然的に、氏の文学観を中心とした「ポーランドに於ける文学の特徴」というものに移っていた。

「文学とは何か」という事に関して氏は「自分にとって〈文学〉とは〈ここら〉である」と定義をされた。

一、文学との象徴的出会いについて

次のエピソードを紹介された。

「私は小学校を卒業するとき、表彰として、一冊の本を校長から頂いた。その本の題名は *Serce* (心臓) といい、イタリー人作家 *Edmund de Amicis* という人の著作であった。内容はイタリー人の独立の戦いの中に於ける、当時

の若者たちの生き方の物語集であった。この一冊の本との出逢いが私の人間形成に、大変に大きな影響を及ぼした」

次に、我々日本人にとって、大変難解なテーマである、ロマン主義という事について、「ロマン主義傾向はポーランドの特徴であり、ポーランド文学も同じである」。代表作家として、生誕二百年のアダム・ミツキエヴィチ（一七九八～一八五五）と、歴史小説を書いたヘンリック・シエンキエヴィチ（一八四六～一九一六）の二人を挙げられた。

又、氏は師範学校時代の体験として「宮沢賢治の『春と修羅』という詩集を通して、自分のこのころの在り方を再認識させられた」。特に『春と修羅』の *Mental Sketch Modified* (心象スケッチ) が深い感動を与えてくれた。さまよえる孤独の修羅というイメージは日本文学に現れた孤独の象徴だった。救済への道を農業の近代化や宗教に見た賢治のイメージのつらなりに深い共感と興味を覚えた。

又、何故、卒業論文（ワルシャワ大学、日本語学科学位論文）に賢治

を取り上げたか、という聴衆からの質問に対しては、「むつかしくて（難解）、面白そうだったから」という冗談めかした答えが返ってきた。

二、翻訳家として

「翻訳は創造であり、一つの芸術である」と力説された。

「ピアノは、毎日ピアノの訓練をする。翻訳も同じだ。毎日、三時間は必ず、机に向かう必要がある。これは訓練である。暮れも新年の三日も変わる道である限り、続けなければならない」

三、一流のものにしか興味を持たない「自分が一流の人間と思いたい、一流と感じる物にしか興味がない」

時期を同じくして、札幌で開催されていた「全国劇作家大会99」にご案内して、劇作家の別役実、太田省吾、グッドマン（米・イリノイ大学教授）らと積極的に会い、精力的に札幌滞在を意義深いものとされた。

小生も二日間、行動を共にして、氏の行動力と膨大な日本文学に関する知識・歌舞伎・能・現代演劇に関するお話を聞かせていただき、この上ない至福の時間を過ごすことができた。氏の生き方が私の心に深い感



銘と足跡を残して下さった事に感謝します。

雪清き

国に来たりて

二十歳の娘

メラノヴィチ

（文責・霜田千代磨・

42号99年5月）

第三十六回例会

ポーランド演劇の現状について

—ヤドヴィガ・ロドヴィチ女史の講演—

三月二日(火)午後七時より、札幌市すみれホテルに於いて、駐日ポーランド共和国大使館参事官ヤドヴィガ・ロドヴィチ女史の講演の夕べと、終了後懇親会がもたれた。

当日は「ポーランド演劇の現状について」の講題の下、元ガルジェニウツェ劇団の女優としての経験を踏まえてのお話であった。

西洋の文化の基には「キリスト教」があり、日本の能、歌舞伎の基には「仏教」がある。

ヨハネ・パウロ二世とポーランド人との関係、特に連帯運動時にカソリック教会の果たした役割。ポーラ



ンド人の精神的な力となった。多様な歴史、民族性の差異の中から、いかなる普遍的なものが導かれてくるのか。

ポーランド人はどのようなものに感動するのか。

演劇の存在する社会的な意味。芸術は人生から消すことは出来ない。そして、話題は「宗教と芸術」に及び、人間とは何か、いかなるものなのか、社会に「生きる」という事に於ける、単なる「消費者」としての生き方と、社会に何が出来るかという「生活者」としての生き方の問題。自分の為に演劇をやるといふ信念。

最後に今年の一月十四日に、イタリア、ポンテデラで亡くなったイエジ・グロトフスキと彼の実験劇場の仕事について、直接ワークショップに参加した経験に基づいて、ポーランド演劇、世界の演劇に及ぼした影響・役割についてのお話しをして、講演を終了した。

(文責・霜田千代磨)

42号99年5月

ポーランド語講習会を顧みて

世話人・富山信夫

まず、本講習会の企画決定と維持に当たられた故今村会長を中心とする歴代委員会、立上げ・運営継続にご尽力いただいた藤原・灰谷委員、吉田・小笠原事務局長及びご懇篤なご指導に当たられたカジミエシ・コグト・亀岡延枝ご夫妻、熊倉ハリーナ、高岡美保、マジエーナ・ティムチヨ、マウゴジャータ・マデイ各講師に深甚の謝意を表します。

さて、一九八九年五月二十一日に開講以来、取敢えずの区切りとして、二〇〇〇年十一月十五日で三十期を終えるに至り、その間、延べ三百二十五人が受講した。旅行や仕事に備えて言葉を覚えたい方、ポーランド滞在のよき思い出を絶やしたくない方、語学の一環として勉強される方、ポーランド文化に接したい方など、六十歳代後半から当時小学生の安藤瞬君まで幅広い階層の方々を受講した。

授業の内容は標準的な読む・書く・話すだけに留まらず、唄って覚えるポーランド語、新聞雑誌などからポーランドの時事・文化など幅広く、楽

しい雰囲気の中で行われた。一番幼い参加者はお母さんと一緒に通った三歳の長野桜子ちゃん、ひと夏のワルシャワ滞在後再び教室に顔を出し、遊びで覚えてきた童謡を披露、皆さんの喝采を博し、さりげなくドヴィゼーニヤ(さようなら)と席をたった。理屈抜きで幼児の覚えは早い。ただただ参った参った!

一九九六〜九七年度総会では、本講習会の成果発表として、受講者一同が高岡講師のピアノ伴奏でポーランド民謡「森へ行きましょう——シユワ・ジェヴェチカ」を、留学生諸君等の応援を得ながら原語で披露することができた。また、受講者の中から現在、ポーランド語長期研修で三名、青年海外協力隊員として二名の方々がワルシャワ、グダンスク、チェンストホヴァで頑張っておられ(二〇〇一年一月現在)、今後のご研鑽と発展を祈る次第である。

なお、三十期全受講者のご協力に感謝し、本講習会の今後の新しい展開を期待するものです。参考まで、受講者中、十期以上参加の方を挙げ

れば、佐々木保子、明道光昭、三浦洋、経塚利律子、後藤嗣雄、山本栄子、大川淑子、吉田邦子、奥野真弓、栗原朋友子さんの各位、全三十期皆勤は灰谷洋子さんと富山信夫の二人である。



第14期ポーランド語講習会 記念

ポーランド語教室OB研修会
(二〇〇三・九・一〇)



おわりに、本講習会成果報告の一端として、ア・ベ・ツェから始めた六十の手習い受講者の一人である私、富山の習作をご笑覧下さい。

(ポーランド語—日本語対訳の習作)

「ヴィスワ川追憶」

一九六四年春のことであった。曇った空の下、平穏に流れるヴィスワの川畔で、ヴァンダ・ルビンスカさんが私に語った、戦争中ソ連軍が犯した或る背信行為について。

「本当ですか?」「本当ですとも」「なんと非道な!」「あそこで!」と。ヴァンダさんは川向こうを指差しながら話した、目に涙して。今でも彼女の話をはつきり覚えている。とてもはつきりと……

それから二十年経って彼女から気になる便りを受取った。「最近の暮らし向きはとも悪くなった」と。いったいどうしたことだ? 気懸りであった。ほどなくして新聞やテレビに連帯運動の衝撃的ニュースが報道された。

八年前の夏、再び、平穏に流れるヴィスワの川畔に立った、夕映の下。ヴァンダさんを思い出す。「今どうして居られるかなあ?」——思い

がめぐる。彼女の家へ何度も電話をしてみる。しかし残念ながら応答がなかった。残念! 心残りのままワルシャワを離れた。帰札後、彼女の息子さんから手紙を受け取った。「残念ながら母は昨秋亡くなりました。一緒にヴィラヌフ宮殿に行ったこと、私も覚えていますが。貴方にお目に掛かれなかったことが悔やまれてなりません」と。ヴァンダさんの永遠の眠りに心から合掌した!

三年前の秋には三度目、思い出深いヴィスワの川畔に立った。晴れた空の下、今は亡きルビンスカさんを偲んだ。今もなお私の思い出の中いとも流れているヴィスワ川——もの言わぬ歴史の証人として。

二〇〇〇年六月 富山 信夫

(熊倉、ワタ、ティムチヨ各先生のご指導・添削に感謝)

Wspomnienie z nad Wisły

Było to wiosną 1964 roku. Pod pochmurnym niebem nad brzegiem spokojnie płynącej Wisły, pani Wanda Lubińska opowiedziała mi o pewnym zdradzieckim czynie, którego dopuściła się Armia Radziecka podczas wojny. „Czy to prawda?” „Tak, to prawda.” „Jakież to nieludzkie!” „Tam!” — mówiła pani Wanda ze łzami w oczach, wskazując palcem na drugi brzeg rzeki. Do dziś pamiętam dokładnie jej opowieść. Bardzo dokładnie...

20 lat później otrzymałem od niej niepokojący list: „Ostatnio życie stało się bardzo ciężkie.” Co się właściwie stało? Martwiłem się. Po jakimś czasie w prasie i telewizji pojawiły się zaskakujące wiadomości o Solidarności.

8 lat temu latem stanąłem znów nad brzegiem spokojnie płynącej Wisły podczas zorzy wieczornej. Przypomniałem sobie panią Wandę. „Cóż teraz porabia?” — zastanawiałem się. Kilkakrotnie próbowałem się do niej dodzwonić, ale niestety nikt nie odpowiadał. Jaka szkoda! Odlatywałem z Warszawy z niespełnionym życzeniem. Po powrocie do Sapporo dostałem od jej syna list, w którym pisał: „Niestety moja matka zmarła zeszłej jesieni. Pamiętam jak byliśmy razem w Pałacu Wilanowskim. Żałuję, że nie mogłem spotkać się z Panem.” Serdecznie pomodliłem się o wieczny odpoczynek dla pani Wandy!

3 lata temu jesienią stanąłem po raz trzeci nad brzegiem pamiętnej Wisły. Pod pogodnym niebem wspominałem zmarłą panią Lubińską. W moich wspomnieniach zawsze płynie Wisła — jako milczący świadek historii.

czerwiec 2000

Nobuo TOMIYAMA

ポーランド料理 (6)

Zupa jarzynowa 野菜スープ

《材料》(8人分)

野菜	合計 800g	鶏肉手羽元	8本
人参	1本	固形コンソメ	2個
セロリ	1本	サワークリーム	大さじ2
キャベツ	1/4個	ローリエの葉	1枚
カリフラワー	1/2個	マカロニ	大さじ4
玉ねぎ	1/2個	塩	少々
長ねぎ	1/2本	こしょう	少々
パセリ	少々	マカロニ	大さじ4
冷凍グリーンピース	100g		

《作り方》

- ①野菜は洗って皮をむき、さいの目に切る。鶏肉も洗っておく。
- ②鍋に湯を沸かし、沸騰してから、鶏肉を入れ、次に野菜を全部一度に入れる。
- ③中火でふたをせず、野菜がやわらかくなるまで茹でる。
- ④固形コンソメ、ローリエの葉を入れる。
- ⑤マカロニを入れる。
- ⑥マカロニがやわらかくなったら、サワークリームを入れる。
* サワークリームの入れ方：カップに熱いスープを少しとり、サワークリームを溶いてから入れる。
- ⑦塩、こしょうで味をととのえる。

ポーランド料理 (7)

Ryba gotowana 鮭のポイル

《材料》(8人分)		〈つけ合わせ〉		〈山わさびソース〉	
甘塩鮭切り身(約150g)	8切れ	じゃがいも	16個(1人2個)	山わさび	300g
ローリエの葉	1枚	バター	大さじ1	酢	50ml
オールスパイス	少々	塩	小さじ1	塩	小さじ1/2
塩	少々	いんげん	400g(1人50g)	砂糖	小さじ1/2
こしょう	少々			お湯	少々

《作り方》

- ①大なべに水2lを入れ、沸騰させる。
- ②オールスパイス、ローリエの葉を入れる。
- ③野菜スープで使った野菜の残りを入れる(セロリの葉、長ねぎの青い部分、玉ねぎ少々)。
- ④香りがでるまで、さらに沸騰させる(約5分)。
- ⑤弱火にして、鮭を入れ、沸騰させないようにして、5分ほど茹でる。
- ⑥お皿に鮭をとり、茹でたじゃがいもといんげんをつけ合わせる。

山わさびのソースを鮭につけていただきます。

〈つけ合わせ〉

じゃがいも：洗って皮をむき、塩小さじ1を加えて水から茹でる。やわらかくなったら、水を切り、バター大さじ1ときざみパセリを加えて、全体にからめる。

いんげん：塩を加えた熱湯で茹でる。

〈山わさびソース〉

[おろし金を使って]

- ①わさびは皮ごと、一日水につける。
- ②皮をむき、おろし金でおろし、塩、さとう、酢、お湯を混ぜ合わせる。

[ミキサーを使って]

- ①わさびの皮をむき、適当な大きさに切る。
 - ②わさびと、塩、さとう、酢、お湯を一緒にミキサーにかける。
- *出来たソースは、びんに入れて、冷蔵庫で2週間保存が可能です。

[わさびソースを使ったヴァリエーション]

マヨネーズと混ぜる：固ゆで玉子につけると美味しい。

ケチャップと混ぜる：辛いケチャップソースとして、肉料理に合う。